優秀賞

世界とつながる「昔の知恵」

島根県立浜田高等学校　２年　横山　麗乃

私は絵に描いたような田舎に住んでいます。鉄道は通っておらず、信号機は1機もありません。最寄りのコンビニは車で30分かかります。小・中学校の同級生は4人でした。夜、出歩く時は変質者よりもクマやイノシシに遭遇しないか常に注意を払います。そのような小さな町で16年間過ごしてきた私にとって、たくさんのお年寄りは様々な事を教えてくれる先生です。先生は習字やそろばん、石見神楽などの伝統文化から農業、料理まで多岐に渡って知識や技術を伝授してくれます。その中で最も私が好きなのが、いわゆる「昔の知恵」です。例えば肌荒れで悩んでいた時にはビワの葉やドクダミなどの薬草で化粧水を一緒に作ったり、稲刈りの後のハデ干しの仕方を教えてもらったりしました。「昔の知恵」を実際に使って生活するうちに、私はどんどん知恵の吸収にのめり込みました。

そんな時、国際協力に興味をもつきっかけをくれた1冊の本と出会いました。『エンザロ村のかまど』です。この本は日本人女性の岸田さんが「昔の知恵」を使って、ケニアにあるエンザロ村の人々の生活を変えた実話です。岸田さんが来る前の村では清潔な水を飲めず亡くなる村人や、裸足で歩くためにけがをして病気になる子供が後を絶ちませんでした。そこで彼女は日本のかまどとぞうりを村人に伝授したのです。かまどの導入によって煮沸消毒した水が飲めるようになり、料理をする時の負担も軽減されました。ぞうりは足の保護だけでなく、販売する事で収入を得る手段としても大活躍しました。エンザロ村の死者数も大幅に減ったそうです。「昔の知恵」であるかまどやぞうりが村人の命を救ったのです。

岸田さんのこの素晴しいアイデアには、彼女の子どもの頃の思い出が大きく関係していました。実は、岸田さんは岩手県にある小さな村の出身です。幼い頃から祖父母や地域のお年寄りに田舎での伝統的な生活の知恵を教えてもらっていたそうです。私は岸田さんとよく似た境遇で育ててもらっていたことに大きな衝撃を覚えました。そして、私が住む何もないと思っていた田舎町は、実は世界を変えられる力をもつ知恵の宝庫だったのだと気がつきました。私は、田舎で育ち「昔の知恵」をたくさん身につけている私だからこそできる事があるのではないかと考えるようになりました。

世界には、生活をより良くするための最新の機械や技術が非常にたくさんあります。それらが途上国の人々を救っているのは確かに事実です。しかし、電気の通っていない村では機械は動かず、修理が必要な時には技術者を呼ばなければなりません。どんなに優れた機械や技術でも、その途上国の人々だけで使えなければ、本当の支援とは言えないのではないでしょうか。だからこそ私は、どこでも誰にでも使え、伝承することもできる「昔の知恵」を岸田さんのように、もっと広く広めていくべきであると思います。

日本は長い歴史を通して災害や貧困、飢餓、伝染病など様々な困難に直面してきましたが、その度に受け継いできた知恵を使って乗り越えてきました。しかし残念な事にその知恵は忘れられつつあります。もちろん今の時代、簡単に検索することはできますが、ネットや本には私が知るちょっとしたコツは殆ど書かれていません。やはり「昔の知恵」は継承しなければだんだん廃れていってしまうものだと思います。私は生活を便利にし、時には命を救ってきた「昔の知恵」を更に吸収し世界中へ、そして次世代へ伝承していきたいです。それが私だからこそできる世界とつながるための、そして未来のための行動だと思います。小さな田舎で得た「昔の知恵」という大きな宝物を胸に、私は今日も夢に向かって進み続けます。「昔の知恵」を知ること、それが、私の第一歩目です。